Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-06

民俗文化・古武道としての槍術の伝承・復元のありかた ： 大阪宝蔵院流槍術の取り組みを中心に

前田, 繁則
小寺, 直樹
平野, 恭平

(Citation)
近畿民俗,187:19-41

(Issue Date)
2021-03

(Resource Type)
journal article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90008007

民俗文化・古武道としての槍術の伝承・復元のあり方

―大阪宝蔵院流槍術の取り組みを中心に―

前田繁則
小寺直樹
平野恭平

はじめに

江戸期には多くの槍術の流派があったにもかかわらず、明治以降、急速に失われていった。現在では、風傳流、佐分利流、貫流、そして本稿で取り上げる宝蔵院流の四つが槍術専門の流派として受け継がれており、神社・寺院での奉納演武や古武道イベントでの演武で稀にみることができるに過ぎない。奈良で発祥した宝蔵院流槍術は、いくつもあった系派を含めて、江戸後期には槍術の中で最大の流派といわれるほどの全国的な広がりをみせたが、現在では高田派と呼ばれる一つの系派、しかもそのうちの槍合せの型と呼ばれる一部が伝承されているのみである。

現代武道は、単なる武技の習得にとどまらず、心身の鍛錬を通じて人間形成を図る教育的な側面をもって親しまれているが、槍術のように、近世からの伝承に重きを置き、それを大切に保存してきた古武道もある。[1] 古武道は、近世から近代にかけて武士から民衆へと広がり、近代以降は市民層が担い手となって、世代をいくつも超えて現在へと伝承されている。[2] この近世から受け継がれてきた古武道は、単なる殺傷技術ではなく、表現様式・思想・信仰・教育法などに日本の伝統や文化が内包されており、民俗文化を構成するものとみなすことができる。かつては、民俗芸能の演目に関係する形で武術が民俗学の対象となることもあったが、このような性格から古武道そのものを民俗学の対象とする研究も現れており、伝承のあり方が問われている。[3]

しかしながら、長い年月を経た伝承の過程では、時代や環境の変化によって武術そのものが喪失することもあれば、伝承の担い手が血族から有志へと変わり、その有志の代表が亡くなった際に型や術技が失われることもあった。失伝しかけた型や術技について、残された有志が稽古を再開する中で伝書類を紐解いて再現しようとすることもあれば、伝承されている型や術技が一部にとどまる場合には、後々にかつての姿を取り戻そうとする機運が高まることもある。そこでは、失われたものにどのように向き合うのかという

型や術技の復元が、重要な論点の一つとして浮かび上がってくる。

民俗芸能の分野では、失われた演目・唄・踊り・道具などを復元する取り組みが数多くあり、古武道の研究でも同様の試みがみられる。[4] それらの中には、残された伝書や絵図などを駆使し、資料に忠実な復元がなされているものもあり、貴重な成果であると評価することができる。しかしながら、資料に基づくだけでは、指導者・経験者の教授を経ているわけではないため、動作のタイミング・緩急強弱・間合・呼吸といった文字として残りにくい要素を欠く可能性があり、実践に展開していくにはそれらを補う必要がある。古武道を取り上げた研究でも、伝書類に基づく復元に偏重するのではなく、術技や理合の面からの検討や実際に伝承されている技法を吟味しての考察の重要性を指摘するものもある。[5]

そのため、実践への展開を視野に入れるならば、資料から正確に読み解くだけではなく、資料に基づいて復元されるものと現在まで伝承されているものが交差する折衷的なものを模索することも考えられる。しかし、復元に際して、民俗芸能では、衰退・失伝した演目・唄・踊りなどを他地域のものを取り入れて復活させることもあるが、武術の場合、師資相承を基本とする伝承系譜による正当性が重視されるという特徴があり、同系流派のものを取り入れるか否かを含めて、復元は忌避される傾向が強い。[6] 現在の伝承活動との関係性や正当性をどのように考えるのかも課題といえる。

以上からは、資料に基づく完璧な復元が目指されるだけではなく、現在の伝承を踏まえた形での復元を目指し、実践に展開していくことも一つの方向性といえる。それは、民俗芸能や古武道にとって、自らのルーツを探ろうとする過程でもあり、伝承活動のあり方の一つとして積極的に評価する必要があると考える。そこで、本稿では、近代以降、著しい衰退をみせ、その過程で多くの型や術技を失いながらも、古武道として現代まで受け継がれている宝蔵院流槍術について、伝承の系譜とそのあり方を示し、その後で、大阪宝蔵院流槍術の取り組みを中心として、失伝した型の復元についての意義と限界を考えることにしたい。

一　近世から現代に至る宝蔵院流槍術

宝蔵院流槍術は奈良発祥の武術であり、創始者は、興福寺塔頭の宝蔵院の院主であった覚禅房胤栄である。胤栄には、宝蔵院流槍術の創始に際して、十文字槍を発明したという伝説もあり、明治の浮世絵師・月岡芳年も連作『月百

姿』の中で「つきの発明」として描いている。胤栄が十文字槍を発明したことについては異論が大勢を占め、古武道によくみられる流儀を神秘化するための一種の縁起話とみられるが、十文字槍の操法に独自の工夫を凝らしたことは確かである。[7] 胤栄は、新陰流の流祖・上泉信綱から剣術を、剣術・柔術・棒術・槍術・薙刀術・軍学などを含む総合武術であった香取新当流の兵法家・大西木春見から槍術を学んでおり、それらを基礎に十文字槍を用いる独自の流儀を編み出した。[8]

胤栄の槍術は、短柄の槍を縦横に立体的に使う操法に特徴があった。宝蔵院流槍術で用いる十文字槍は、鎌槍とも称し、全長九尺～一丈（約二・七～三メートル）、図1のように、穂長六～七寸（約一八～二一センチメートル）、鎌幅四～五寸（約一二～一五センチメートル）、尖った形状の石突の長さ四～五寸（約一二～一五センチメートル）となっていた。現在の稽古でも、ほぼ同じ約二・七メートルの十文字の形をした木製槍を使用している。鎌槍の特徴としては、穂にも柄にも横手のない素朴な形状の素槍に比べて、攻防変化の多様性が指摘される。攻撃面では、穂先で突く以外に、押したり引いたりすることによって鎌で切る、防御面では、鎌を水平にして身構えて、相手の槍の突きを鎌で引き落としたり上へ押し上げたりする、下から掬

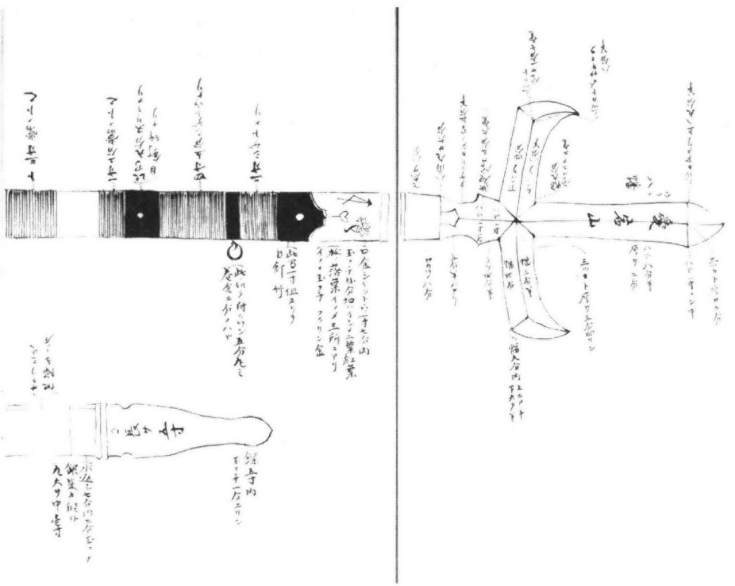

図1．宝蔵院流槍術で用いられる十文字槍の穂先と石突の図
（『十文字鎌兵法 家元諸傳秘録 全』1859年、奈良県立図書情報館所蔵、請求記号57-1-26）

い受けて鎌で掛け落としたり巻き落としたりするなどによって、攻撃をかわすことができる。このような槍の操法には、柄を短くして取り回しを容易にすることが適していた。

胤栄の槍術は、香取新当流の槍術が基礎にあるとみられるが、理合としては、新陰流の影響が色濃く認められるといわれる。宝蔵院流槍術では、相手の仕掛けと同時に攻防一体で技を施して勝つ技が多いこと、敵の手足を攻めて生命を奪わずに闘争心を失わせる技が多いことなど、敵を十分に働かせて、それに乗じて勝ちを得る理がみられ、「槍術における活人剣」と評される。このような術技と理合が、泰平の世となった時代に受け入れられ、宝蔵院流槍術が江戸期に広く普及した一因であるとされる。[9]

この胤栄の生み出した宝蔵院流槍術は、後継の禅栄房胤舜に受け継がれた。胤舜は、胤栄の直弟子の奥蔵院の老僧に学んだとされるが、鎌槍の操法と術技を整理し、流儀としての体裁を整え、伝書の体系を確立した。この他にも、図2に示すように、胤栄の高弟であった中村市右衛門直政（福井藩松平家家臣）、その弟子の高田又兵衛吉次（小倉藩小笠原家家臣）、胤舜の下で学んだ中御門半入胤張・磯野主馬信元（熊本藩細川家家臣）・下石平右衛門三正（白河藩松平家家臣）といった門弟たちにも伝えられ、彼らがそれぞれ系派を起こし、中村派・高田派・磯野派・下石派などとして日本各地に広がっていった。[10]

本流としての奈良の宝蔵院流槍術は鎌宝蔵院とも呼ばれ、代々の院主が宗家となり、江戸期を通じて槍術の伝承を行っていた。三代の覚舜房胤清は長尾一入資政（長尾派）を、四代の覚山房胤風は伊能宗右衛門由常（伊能派）・旅川弥右衛門政羽（旅川流）・姉川忠右衛門安知（姉川流）を輩出し、系派が全国に広がっていった。嘉永・安政頃の全国の著名槍術家を記した文献によれば、槍術家三七九名のうち宝蔵院流系統の者は一二六名、全国一四四ヵ所のうち宝蔵院流系統のある場所は七二ヵ所となっており、十文字槍を専門とする有力な流儀が宝蔵院流系統以外に現れなかったこともあり、江戸後期の総勢力はかなりの大きさとなっていた。[11] しかし、明治の世になると、鎌宝蔵院の伝授活動はみられなくなり、神仏分離によって宝蔵院とともに喪失していった。

鎌宝蔵院と系派での型の差異についての研究もあるが、中村派・高田派・磯野派などといった系派は便宜上の呼称であり、正式にはいずれも宝蔵院流である。[12] 槍術史研究の第一人者であった島田貞一によれば、胤栄の晩年の頃には流儀の大元が確立していたことから、「内容も各系統によってそれぞれ独自の工夫が加えられてはいたが、基本的

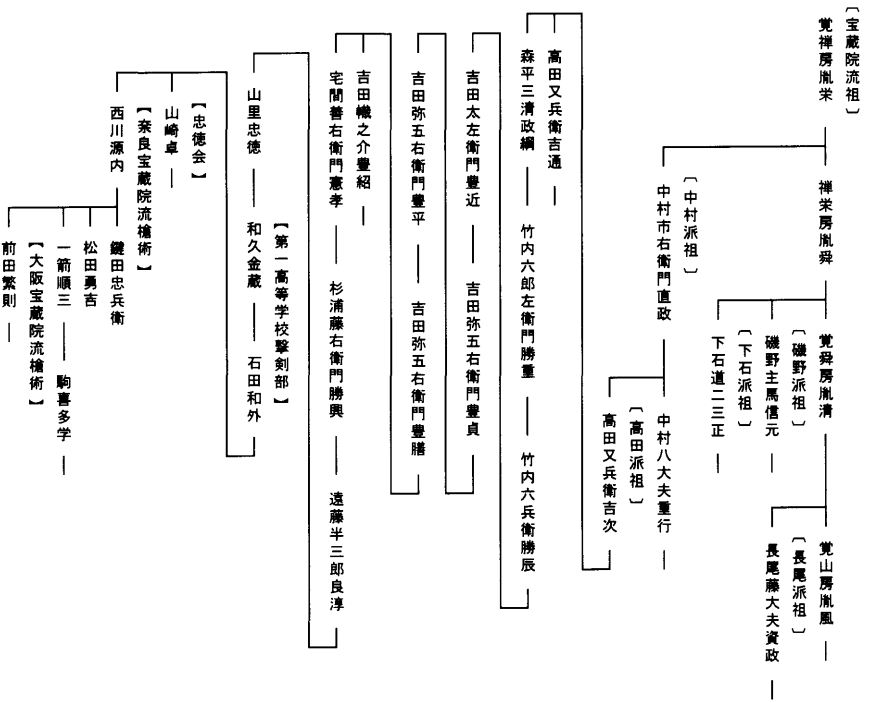

図２．宝蔵院流高田派槍術の伝承系譜

（資料１）石川哲也「現伝承の宝蔵院流高田派の術技と伝書に記された術技の差異についての研究」（『関西武道学研究』第23巻第１号，2014年３月）11-15頁。

（資料２）島田貞一・今村嘉雄・齋藤聰編『日本武道体系　第７巻』（同朋舎出版，1982年）203頁，210-211頁。

（資料３）奈良宝蔵院流槍術保存会『宝蔵院槍術』（奈良宝蔵院流槍術保存会，2013年８月）。

（注１）高田派の伝承系譜については，現在伝承活動を行っている組織に連なるものを中心に示している。

（注２）系譜図中の吉田弥五右衛門豊平については，資料１では系譜から外れているが，資料２では系譜に連なっている。本稿では，暫定的に系譜に連ねているが，今後検証する必要がある。

には諸派ともほぼ一致したものであったらしい」[13]として、大きな違いはないともいわれる。

現在伝承されている宝蔵院流高田派を築いた高田又兵衛吉次は、一五九〇年に伊賀国白樫に生まれ、一六〇三年に中村直政に入門して宝蔵院流槍術を学び、胤栄や胤舜の下でも槍術を学んだようである[14]。吉次は、大坂夏の陣にも参戦したようであるが、一六一五年に直政より印可を授けられ、江戸で道場を開いて大名や旗本に槍術を指南した。吉次は、一六二三年に明石藩の小笠原忠政に仕え、主家の豊前国小倉への移封に従った後、一六三七年の島原の乱で手柄を立て、一六五一年には三代将軍・家光の御前で槍術の妙技を披露した。吉次は、進退・屈伸・表裏・悠急・剛柔を説き、法形一〇一ケ条や巴之術一五ケ条を考案するなど、鎌槍の哲理を深めた。吉次の長男・斎宮吉深は伊賀国に戻り伊賀上野の藤堂家に、次男・新左衛門吉和は福岡の黒田家に、三男・八兵衛吉通（又兵衛を称して相続）と四男・弥太郎吉全は小笠原家に仕え、宝蔵院流高田派を伝えた。息子たちの他にも、下総国関宿藩主の久世広之をはじめ、森平三清政綱・河辺弥右衛門盛連・不破慶賀といった優れた門弟がおり、宝蔵院流高田派は、幕末に至るまで江戸を含め日本各地で術技の研鑽が積み重ねられていった[15]。以下では、近代から現代に至る伝承の過程を中心にみていくことにする。

幕末から明治にかけて、戦闘のあり方は大きく変わり、戦いから離れた日常生活の中でも携帯に不便な槍は、時が経つにつれて単に過去の祖先の士風を継承し、その栄光を象徴するに過ぎないものとなる傾向があった[16]。また、幕末には、試合稽古を重視する気風が高まり、型を一種の儀礼的なものとみて、型を熱心に稽古する者が減少し、各流派で型の伝承の危機が訪れた。新時代の実用武術にも体育競技にも不適当となった槍術の衰退は甚だしく、宝蔵院流に限らず、各地の槍術が消えていくことになった[17]。

明治維新は槍術放棄の時期であったが、明治中期になると、国粋思想の勃興にともない文化や伝統を保存しようとする気風が生じ、一八九五年の大日本武徳会の設立もあって、槍術復興の兆しがみられた。江戸期の練達者が残っていた明治・大正期には、型に習熟した者こそ減っていたが、素槍では無辺流・種田流・兵法流・風傳流・正智流・疋田流・新天流、鍵槍では鏡智流・佐分利流、管槍では空玄流・行覚流・貫流、鎌槍として宝蔵院流諸系派が残っていた。しかし、昭和初期にかけて、古老の相次ぐ死去とともに絶伝する流派が増加していった[18]。

そのような中で、宝蔵院流が完全に失われなかったのは、旧制第一高等学校撃剣部の有志が、徳川御三卿の田安家に

仕えていた山里忠徳から宝蔵院流高田派槍術の指導を受け、五〇本といわれる槍合せの型を伝えられていたことが幸いした。山里は、剣は東軍流、槍は宝蔵院流高田派、弓は日置流、薙刀は一心流を身につけていた。[19] 第一高等学校撃剣部の佐々木保蔵は、「日本の武士道の象徴である槍術が消滅しようとしているのを憂え永久に残すには学校において伝承するほかはない」[20]と考え、一九一八年冬に矢野一郎・横田正俊・和久金蔵の三人を山里の下に派遣して宝蔵院流高田派を学ばせた。その後、宝蔵院流高田派は、第一高等学校撃剣部に受け継がれていったが、第二次世界大戦を境に稽古は中断されることになった。[21]

戦後、旧制第一高等学校は、学制改革により新制東京大学教養学部に組み込まれ、宝蔵院流高田派の伝承は途絶えた。第一高等学校撃剣部で槍術を学び、後に全日本剣道連盟会長に就く石田和外は、佐々木の遺志が消えてしまうことを憂えた矢野の依頼を受けて、一九六五年からメモや記憶を頼りに復元を開始した。石田が教えを受けた、山里直伝の和久も協力していたが、長い時間が経つ中で型の手順の記憶が薄れていたようであり、かつて稽古に参加していた者たちが集い、槍合せの型として表一四本・裏一四本・新仕掛七本の計三五本の復元に成功した。[22] 山里より伝えられた五〇本の型の中には、「三段目」、「乱れ」、「仕掛」というそれぞれ五本の技を連続させたものもあったようであるが、これらの一五本は失伝した。[23] この復元の成果として表一四本が、一九六七年に日本武道館で開かれた全国実業団剣道大会で石田と穴山徳夫によって戦後初めて披露された。[24]

ここで復元された宝蔵院流高田派の槍合せの型は、鎌槍で素槍を制する術技となっており、表一四本は鎌槍を用いて薙ぎ・突き・払う技が多く、裏一四本は表の型の変化を示したものとなっており、最後に鎌槍の鎌を相手の手元に擦り込んで小手内を斬る技が多く、新仕掛七本は高度な術技が多くなり、縦横に鎌槍を使う立体的な操法が多くなっている。[25] 裏の型にみられる擦り込みは、鎌槍ならではの技術といえる。最後の新仕掛は、古伝の目録にはみられず、いつ頃制定されたのか不明ではあるが、表や裏の型に比べて複雑な動作をともなう躍動的な型であり、応用的な術技となっている。

失伝を免れた型は、旧制第一高等学校撃剣部ＯＢの穴山・坂西太郎・山崎卓たちが石田の指導の下、第一生命保険の道場で稽古を続けていたが、一九八九年に社屋改築のために道場が閉鎖されることになり、宝蔵院流高田派の伝承活動は一時休止となった。その後、槍術の稽古を希望する者が現れ、山崎も石田から受け継いだ宝蔵院流高田派を

伝承していきたいという想いから、東京富坂の警視庁武道場を借用して稽古を再開し、山崎を中心として東京で槍の会が発足することになった。槍の会は、埼玉県狭山市に拠点を移した後、現在は忠徳会となって、山里より伝えられた宝蔵院流高田派槍術と一心流薙刀術の伝承活動を再び東京を中心に行っている。[26]

現在に受け継がれる宝蔵院流高田派は、旧制第一高等学校撃剣部の関係者の努力と執念で伝承されてきた。穴山による絵目録の作成や山崎による指南心得帳の作成は、その功労者である石田の教えを忠実に守り、それを変えずに後世に正しく伝えていこうとする規範意識の現れということができる。同校撃剣部ＯＢのネットワークによって伝承活動が進められてきたこともあり、先輩―後輩の関係性が、そのような規範意識をより強めることになっていたとみられる。穴山が、「私どもは第一生命の道場で、佐々木先生の御遺志を承け継ぎ、宝蔵院流高田派の本流を守って行くことにより、石田先輩とのお約束を果して行きたい[27]」と石田の追想集で決意を表明していることからも、本流としての自負と覚悟が垣間みえる。

二　奈良と大阪での宝蔵院流槍術の伝承活動

かろうじて命脈を保った宝蔵院流槍術であったが、発祥の地である奈良に戻ることによって新たな展開をみせることになった。里帰りのきっかけとなったのは、奈良市長で剣道家でもあった鍵田忠三郎が、一九七三年に奈良柳生での剣道の指導者講習会に講師として出席した石田を偶然宝蔵院墓地に案内したことである。鍵田は、宝蔵院流槍術を発祥の地である奈良に戻すことを石田に懇請し、一九七四年九月の奈良市中央武道場（鴻ノ池武道場）の竣工式で石田・坂西・山崎が表一四本を披露した。[28] 石田が要請を受けた理由としては、「一高撃剣部は昭和二十五年に消滅しており、その卒業生もやがては居なくなって、これを伝える者がなくなることは必定と考えた[29]」ためといわれる。

これを契機として、西川源内・鈴木真男・松田勇吉・鍵田忠兵衛・一箭順三といった奈良の剣道家たちが石田に入門し、一九七五年九月に日本武道館で表一四本の型、一九七六年一〇月に第一生命保険の道場で裏一四本の型、一九七七年一二月には同じく第一生命保険の道場で新仕掛七本の型を習得した。その間の一九七六年一二月には、奈良市中央武道場で石田から西川たちに宝蔵院流高田派槍術槍合せの型の伝授式が行われ、宝蔵院流が奈良に里帰りす

ることになった。奈良での宝蔵院流高田派は、奈良市武道振興会の槍教室として有志が集って稽古を開始し、奈良市の後援の下に伝承活動に取り組むことになった。石田はその後も何度か奈良を訪れて、指導を行ったようである。[30]

現在に残る高田派は江戸に伝わっていたものであり、近代以降の伝承の中心も東京であったことから、奈良との関係性は薄いものの、宝蔵院流槍術としては発祥の地であり、その関係性を見出すことはできる。この奈良で動き始めた宝蔵院流槍術の復活にかける地域の人々の熱意もあり、各所から秘蔵の伝書の寄贈があったといわれている。[31]奈良で活動が開始されると、高田派に限らず宝蔵院流槍術に関係する資料収集が進められていったように、宝蔵院流槍術を単に奈良発祥の武術として型や術技だけを戻して伝えていこうとするのではなく、脱文脈化と再文脈化の過程として、地域への定着を図る動きと、自らのルーツを中心に歴史性を追求する動きをみせてきた。

市長が里帰りを望み、奈良の有志で実現したことから、地域とのつながりが当初から望まれる傾向にあったが、一九九一年六月に伝承母体となる組織として奈良宝蔵院流槍術保存会が設立されると、奈良とのつながりが強く意識されるようになった。同年一〇月には宝蔵院流と関係のあった興福寺で奉納演武を行い、一二月に催される奈良の伝統行事・春日若宮おん祭にも参加し、これらを毎年の恒例行事とするようになり、さらには新聞・タウン情報誌・テレビなどで活動を積極的に発信し、奈良発祥の武術としての定着が図られてきた。[32]この奈良での取り組みについては、「地域の人々と伝承を伝える師範の努力によって復活し、また地域行政の後援もあって現在に至るも伝承されている。この姿は武術を伝承保存するうえで、ひとつの理想的な形」[33]と評価される。奈良宝蔵院流槍術保存会の設立以前から、古武道大会や全日本剣道演武大会への参加はみられたが、設立後は、鹿島神宮・明治神宮・下鴨神社・厳島神社などの有名な神社に加えて、宝蔵院流槍術と縁のある場所として、高田派を創始した高田吉次の生誕地である三重県伊賀市白樫の岡八幡宮、胤栄・胤舜に学んで土佐藩に宝蔵院流槍術をもたらした馬詰権右衛門親貞を顕彰して高知県高知市洞ケ島町の薫的神社などでも奉納演武を行っており、活動の広がりをみせている。[34]

また、奈良宝蔵院流槍術保存会では、流派の始祖にあたる胤栄や吉次の顕彰や宝蔵院の歴代院主の供養、さらには宝蔵院流槍術の伝書類の調査・翻刻など、現在を起点として過去との関係性を探ろうとする取り組みもなされている。二〇〇二年一二月に奈良国立博物館旧館西側の宝蔵院跡地に「宝蔵院流鎌槍発祥之地顕彰碑」を建立した他、胤栄

が武神・摩利支天を祀った大石（興福寺三重塔前）や歴代院主が眠る宝蔵院墓地（奈良県奈良市白毫寺町）などの関連史跡も取り上げている。宝蔵院流槍術に関係する資料収集の成果としては、西川によって資料の翻刻が数冊刊行されており、宝蔵院流槍術の歴史書を編纂する試みもみられた[35]。奈良発祥の武術というアイデンティティの形成のためにルーツや歴史の探索を行い、それが地域への定着にもよい影響を及ぼし、地域に根差した伝承活動につながっている。現在まで伝わる多くの古武道が、宗家や代表者の個人的な献身によって伝承・保存されている中で、地域や行政を取り込んで実現しているところに特徴があるといえる。

奈良の宝蔵院流高田派は、石田伝を基本として継承している[36]。しかしながら、奈良での伝承の過程では、型の中での術技や動作に変化が生じている面も散見される。二メートルを超える鎌槍を重さに耐えながら扱うとともに、片側六～七センチメートルという短い鎌の部分を巧みに操って相手の素槍を制するというのは、極めて難しいことであり、しかも複雑な足捌きや微妙なタイミングが加わると、その難易度はさらに増すため、型の習得と成功率の向上には必要な措置であったと思われる。とりわけ奈良での活動では演武にも力を入れていることを考えると、技術的な問題から型の習得の難易度を下げる措置としては、やむを得ない対策であったように汲み取れる。

現在の奈良宝蔵院流槍術保存会では、毎週土曜日に奈良市中央武道場を中心に数十名の参加者で稽古を行っている他に、東京稽古会や名古屋道場、ドイツのハンブルグ道場もあり、宝蔵院流槍術の最大組織として伝承活動を行っている。また、奈良では、昔ながらの目録・免許・免許皆伝の称号に加えて、表・裏・新仕掛の習得に応じて初級・中級・上級の級位の認定も行われるなど、伝授の体系化も進められている。組織や制度を整えることによって伝承が途絶えることを防止するとともに、近年では、子供の槍教室の開講、女性への門戸の解放、稽古槍に用いる樫の植林など、槍術文化の保存と拡大にも努めている[37]。奈良の宝蔵院流高田派の代表は、石田から指導を受けた西川・鍵田・一箭を経て、現在は駒喜多学となったが、受け継いだものを地域に根差して守り伝えていくと思われる。

一方の大阪宝蔵院流槍術も、奈良と同じく石田伝の系譜を汲むものである。奈良での活動の創始期から四〇年以上にわたり伝承活動に携わってきた前田繁則が、高齢のために奈良での活動に区切りをつけるとともに、長年の武道の修練を経てようやく指導者の入り口に至ったと考え、奈良宝蔵院流槍術保存会の大阪道場として活動してきた東大阪を拠点として、二〇一八年より新組織を立ち上げたことに

始まる。大阪宝蔵院流槍術は、現在、毎週火曜日に東大阪市立玉川小学校内の体育館に四～五人が仕事帰りなどに集い、宝蔵院流高田派の稽古を行っている。奈良もほぼ同様

写真１．大阪宝蔵院流槍術の稽古風景（筆者撮影）

であるが、稽古では、写真1にみられるような二・七メートルの鎌槍と三・六メートルの素槍の二つを用い、まず各人が基本となる足捌きや突きなどの稽古を行い、次に二人一組となって型稽古に移る。型稽古では、槍合せの型として、仕方（鎌槍）と打方（素槍）で表一四本・裏一四本・新仕掛七本を習熟度に応じて稽古することになる。基本的には、素槍の仕掛けに鎌槍で応じて制する術技を習得していくことになる。

大阪宝蔵院流槍術では、奈良での活動のように地域との強い結びつきを志向するものではなく、全日本剣道演武大会や西日本古武道大会など、関西を中心に古武道各種の流派が集う場で演武を行うにとどまっているが、東京や奈良にはみられない試みが行われている。その一つが、これまでの奈良での伝承活動の中で生じた細かな術技や動作の変化を元の形に戻そうとする取り組みである。

一例を挙げると、表の型の一二本目「鱗」は、現在、①打方が前面（顔）を突いてくるのを、仕方が正面で鎌を掛けて引き落とし、②打方は攻撃を防がれたため、後退しながら相手の裏胴（腰の辺り）を狙って突き、仕方は鎌槍を反転させて相手の槍の柄と自分の槍の柄が交差する形で上方へ打ち上げ、すぐに鎌槍を直し再度鎌で掛けて引き落とすという動きになっている。しかし、当初は、①の動作は

同じであるが、②の動作が異なり、打方は後退しながら前面（顔）をもう一度突き、仕方は鎌槍を反転させて、その鎌で下から相手の槍の柄を掬うように跳ね上げ、上がったところで鎌槍を直し鎌で掛けて引き落とすというものであった。動く素槍の柄を鎌のわずかな部分のみで捉えることは難しいが、柄と柄を交差させる形で当てて捉えるのであれば、外すことが少なくなる。伝承の過程で型を容易化する変更が生じており、大阪では、その両方を稽古することによって、型や術技の意味や理合を深く考えることにつなげている。

そして、もう一つが、失伝した型の復元に挑戦していることである。このような取り組みについては、それを担う中心的な人物の経験と探求心が大きく影響していることは間違いないが、背景として、石田伝の本流という立場もなく、発祥地という地域との関係性も弱いということが重要であった。自由な立場で新たな挑戦を行うことが、参加者の動機となり、組織の存続意義となっている。以下では、この大阪宝蔵院流槍術での失伝した型の復元の取り組みを検討することにしたい。

三　大阪宝蔵院流槍術での失伝した型の復元の試み

現在伝わっている宝蔵院流高田派は、すでに触れたように、戦後に再興されたものであり、時に復元された武術といわれることがある。確かに、組織的な伝承活動が一時途絶えたことは事実であるが、幸いなことに、型や術技を体得した者がいたため、流派の根幹となる部分は残っており、完全に失伝するという事態は免れることができた。古伝と現在の宝蔵院流高田派の型や術技を比較・考察した研究によれば、現在のものは、型の順番や名称の差異がみられるが、概ね江戸に伝わっていたものを踏襲しているとされる[38]。

現在の表の型の一本目「到用」、二本目「一挽」、三本目「粘花」は、かつての太刀合せ（古伝の一～三本目）、長刀合せ（古伝の四～六本目）に続く、槍合せ（古伝の七～九本目）に相当するものであり、「引き落し」、「巻き落し」、「巻き返し」といった宝蔵院流の基礎的な技術を体得する重要な型であった。この三本については、高田吉次の高弟であった久世広之が「鎌鑓表の三つ鑓に宝蔵院流奥までの秘術をあらはし候」[39]としており、現在でも古伝の動作・技術・理合が受け継がれている。太刀合せ・長刀合せ・槍合せの九本の型は、鎌宝蔵院でも高田派でも基本の表の型として位置づけられている[40]。表の型というのは、流儀の基礎

を示す最も公式の形であり、最初の教えであると同時に奥儀に一貫するものであると位置づけられるが、残念ながら九本のうち六本が失われてしまっている。

大阪宝蔵院流槍術では、失伝した型のうち、まず太刀合せの「飛乱」、「虎乱」、「挙一」の三本の型を復元することを試みた。この太刀合せの型について、石田は、「槍合せの外に太刀と合せる三本の型もあったと云うが、これは山里先生から伝授に至らなかった」[41]としており、旧制第一高等学校撃剣部にも伝わっていないものであった。これまでにも伝書類の調査・研究に基づいて鎌宝蔵院や宝蔵院流諸系派の型や術技を復元しようとする試みはみられたが、大阪宝蔵院流槍術の取り組みは、伝承活動という実践への展開までを志向する復元であるといえる。[42]

復元の方向性として、例えば能楽分野での廃絶曲の復元をみると、原上演時の様式・実態の再現、現行演目に準じた様式・実態の設定、現代能としての様式・実態の工夫という三つの方法があるという。[43] 現行演目に準じた様式・実態の設定については、形式的な簡単な復元と評価されることもあるが、失われた能楽のかつての姿を知ることを重要と考える場合には、現代の技法による復元であっても意義があるとされる。[44] 大阪宝蔵院流槍術の取り組みも同様であり、現在伝承されている術技や動作を基礎として現行の様式で整える立場に近いものといえる。それは、復元を進めるに際して、復元する型についての十分な情報が記された資料が残っていることに加えて、復元する型の動作や理合を検討できる流派の根幹となる体系が伝わっていること、復元の担い手が現存の術技を十分に体得していることが求められると考えたためである。

復元された型や術技をめぐる評価は様々であるが、古伝が完全な形で伝わっていない流派にとって、伝書類の入念な検討に基づいた実技をともなう復元によって、かつての姿に少しでも迫ろうとすること、その過程での学びを伝承活動にも生かせることなどの意義があると考えられる。ただし、伝承活動を行う中で復元を行う場合には、伝承されている術技と復元した術技を明確に分け、それぞれを正しく位置づけること、復元した術技が伝承されている術技の動作や理合に影響ないし干渉しないことなどに注意すべきである。また、資料に忠実に復元しようとしても、文字として残っていない要素までを十分に反映できているとは限らないことを踏まえると、あくまでも一つの仮説や試論として復元した型を提示するというような姿勢が望ましいのではないかと考える。そのため、復元したものを根拠として実際に伝承されているものを批評・批判することは慎まなければならないとも考える。以下では、宝蔵院流高田派

の太刀合せの型の復元過程を紹介する。

依拠する資料の収集・選定

宝蔵院流高田派は、比較的明瞭に体系化されており、江戸期に広く普及していたことから、詳細な伝書類が数多く残されている。復元に際しては、まずそのような資料の中から復元に必要な情報を与えてくれる、信頼に値するものを選定することから始めなければならない。久世による『鑓秘書』[45]は、高田派の基礎資料として位置づけられるものであり、大阪宝蔵院流槍術でも多くを依拠する資料とした。しかし、『鑓秘書』は、型の手順が簡潔に示されているものの、動作や理合の情報量が限られているため、この他にも高田派の伝書類を合わせて検討するとともに、流儀の源に当たる鎌宝蔵院の伝書類も参考として用いることにした。[46]師資相承による型や術技の習得が不可能なため、可能な限り同系統に近いところの資料を用いることによって、わずかながらでも正当性を担保したものである。

資料に基づく型の手順・動作の解釈

次に、各種資料から型の手順や動作を読み解く作業であるが、本稿では、「飛乱」を例に簡潔に説明する。まず、基本とする『鑓秘書』によれば、次のように記されている。

是は太刀持手をうち、かへひたりのあしをふミ出しかまへたる処へ十文字のさきをこふしの下へさしあてかふりて行太刀持ミきのあしをふミいたし左のあしを引太刀をなをして十文字のよこてきわを打其時十文字をなをしさたにはすして左右のこふしの間へつき込候て勝なり[47]

他の高田派の伝書類からも情報を収集するが、その中で比較的詳細に型の手順や動作について書かれている『寶藏院鎗術口傳書』をみると、次のように記されている。

一請太刀ハ太刀ヲ冠、十文字鑓ヨリ来ル所ヲ鎌ノ所ヲ上ヨリ足ヲ入ナカラ切ル、入タル足ヲ又引、十文字ノ穂先ヲ左手ニテ詰

○十文字鑓冠、スラ〳〵行キ、鎌ヲ上ヨリ切ル所ヲ詰、太刀ノ手元エ下段ニヲロス、俣冠ノ通リハ請太刀ノ目鼻ノ間エ穂先ヲアテ斬ル、冠ハ同前、

請太刀ヨリ鎌ヲ切ル時、少シヌケル心持ニテ下段ニヲロス[48]

合わせて参考として、鎌宝蔵院の『家元諸傳秘録』を確認すると、次のように記されている。

初手ノ打太刀ハヱンヒニカマユル也［是ハヒタイノ上ニ太刀ヲ立テカマユルナリ］十文字ハヲコシテ上段少鑓先左ヘソムカスル［真中ヱヨル処ヲ］打太刀鎌ノヨコテヲ右足ヲ出テ切拂フ処ヲ一拍子ニテ［ハヅスコトクニ］行足ニ勝ナリ行足トハ左ノ足ヲツムル事ナリ［太刀左足少引勝付トハフセテ持テキノ手元ヱヤリ先ヲ付ル手ハ屈曲ナキ様ニ勝付也］先師［胤栄覚禅房法印］ノ時ハヨコ手ニ太刀ヲ切リ當テサセテ勝今ハ［〇禅栄房胤舜也］不當勝也[49]

（引用中の［　］は、原資料中の朱字注記部分を示す）

資料による型の手順や動作は、次のようになる。写真2にみられるように、打方（太刀）は古流の剣術にみられるいわゆる霞の構え、仕方（鎌槍）は大上段に構え、槍先を打方の拳の下に合わせる。両者とも一足一刀の間合まで前進するが、仕方は先手を取ろうとする気構えをもって打方の動きを誘おうとする。打方は、その誘いに応じて、右足を前に出し、左足を引いて、鎌槍の横手を切り払おうと試みる。仕方は、間合を詰めつつ切り払いを避けて、写真3のように、そのまま打方の両手の拳の間に槍先を突き込んで勝ちを得るというものである。

写真2．太刀合せの型「飛乱」の構え（筆者撮影）

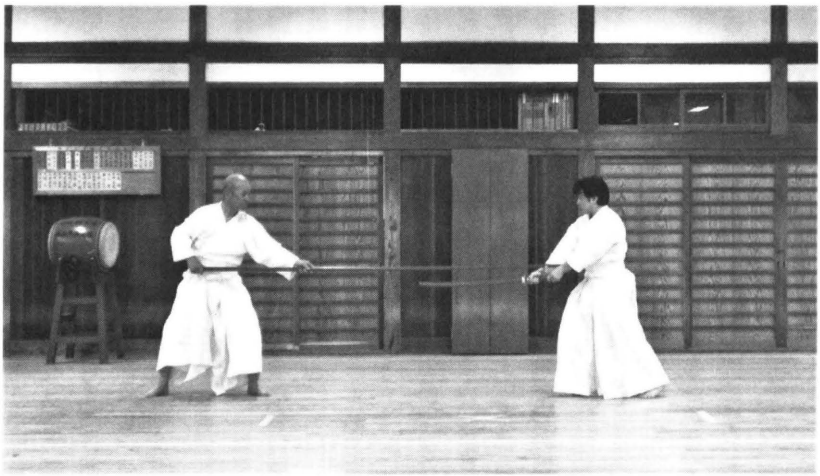

写真３．太刀合せの型「飛乱」の突き込み（筆者撮影）

伝承を踏まえた動作の確定と意味・理合の検討

最後に、資料レベルでの復元から実技レベルでの復元に移る。実際に、仕方と打方に分かれ、資料から読み解いた動作を踏まえ、また伝承されている術技や動作に反しないように、細かな動きやタイミングを探りながら、一つ一つの動作を確認していく地道な作業となる。いくら詳細な資料が残っているとしても、直接指導や口伝を受けたわけではないため、実技レベルでの復元では、担い手によって細かな動作の差異が生じやすく、それらの意見を戦わせながらの作業となる。

資料の解釈から型の手順や動作の大枠は把握できるが、細かな動作のタイミングや緩急強弱、お互いの間合や呼吸などは知り得ないところがあり、それらを入念に検討していくことになる。実際に現存の術技を体得した者が担い手となると、普段の動作・間合・呼吸と異なる要素もあるため、違和感を覚えることがある。この違和感こそが重要であり、普段の稽古では鎌槍と素槍という長い物同士での型に慣れているため、それよりもはるかに短い太刀に対峙する際のタイミング・間合・呼吸の違いに自ら気づき、その習得によって本来の槍術技法の幅の広さを理解することにつながる。

この一つの仮説として復元した型に対して、実技をとも

ないながら意味や理合を考えていく作業を加えることによって、より確かな術技へと昇華させていく必要がある。この過程でも、資料に向き合うことが有力な手掛かりであり、高田派の伝書類の中には型の意味や術技の理合について説明したものもある。『宝蔵院流十文字鎌目録之事』もその一つであり、そこでは「飛乱」について、次のように記されている。

飛ハとふと云事にて鳥の両羽を遣ひ飛行の形鳥の行んと欲する時其目当として森或ハ水辺へなりとも其止る所を極めて行也両羽に少しも滞あれは中端にして地上へ落る也技合も左のことく敵に立向ひ勝負を決する時技合に少しもおこたりなく敵の手元へ入込突留るにハ飛乱の心を持って仕勝口傳なり　…中略…　修業ニてもかくのことく怠慢有てハその位に至らぬなり　…中略…　爰にてハ身躰健に飛乱るといふように左（不明）へ身をひらきて大業をかけて飛込へし不断の飛乱の技を施して入込事と思ひてハ遠ふなり[50]

そこでは、体を大きく捌いて突き込むような過度に大きな動きをみせることが戒められ、目標をしっかりと見定めて無駄なく突き込む気構えが説かれる。しかしながら、失われた型や術技の場合、その意味や理合のすべてを資料から引き出すことは難しく、現在伝承されている型や術技に基づいて解釈・理解すること、さらには他の古武道での知識や経験で補完することも避けられない。それ故に、動作を確定する作業以上に、この意味や理合を検討する過程で、現在の伝承を踏まえた解釈・理解が入りやすくなり、担い手による差異が生じやすくなるともいえる。形の上だけの復元ではなく、伝承活動という実践の中に復元の成果を取り入れようとすると、伝承されている型や術技と同じように、それらの意味や理合を合わせて再構築していくことも必要である。

以上のような復元過程を経て、大阪宝蔵院流槍術では、二〇一九年六月に行われた第二五回西日本古武道大会で太刀合せの型三本の演武を披露した。復元された型や術技は、依拠する資料の選定、その資料の解釈、実技レベルでの動作の確定、意味や理合の検討といういくつかの過程を経る中で、大小様々な差異が生じる可能性があり、唯一無二の型や術技になっていることも、古伝本来の型や術技になっていることも、決して保証されるものではない。この取り組みを第一歩と位置づけ、さらなる資料の収集・研究を進めると同時に、日々の稽古で磨いた術技を復元にも反映さ

せ、また時には演武会などを通じて他の武術や流派からの意見や批判を踏まえて、復元した型や術技を磨いていく必要がある。大阪宝蔵院流槍術では、次の課題として、太刀合せの型に続く長刀合せの型の復元に取り組み、実技をともなう伝承活動の実践の中で宝蔵院流高田派槍術の全体像に少しでも迫ることを目指している。

現代での失伝した型や術技の復元の意義は、単に本来の武術がもっていた殺傷技法を取り戻すことにあるのではなく、失われた術技という古伝、流儀の全体像というかつての姿を追い求める挑戦にある。[51] ここでいう古伝やかつての姿は、「幾重にも解釈を施された、「そうであると信じられている過去」と考えるべき」[52]という見解があるように、過去の資料と現在の伝承が交差する中で再構築されたものである。しかし、再構築されたものであったとしても、伝承されているものが一部にとどまる流儀の場合、それらを追い求めることが、実際に伝承されているものとは異なる価値を生み出し、未来に向けての伝承につながっていくのではないだろうか。

おわりに

民俗文化の一つともいえる古武道の伝承のあり方と今後の取り組みを問うものとして、本稿では、宝蔵院流槍術を取り上げてきた。そこでは、異なる組織による多様な伝承のあり方が確認でき、古武道をめぐる伝承のダイナミックな運動を理解する一助になったと考える。近代以降の伝承過程では、同一のルーツから出発しながらも、組織の出自や歴史、地域との関係性、担い手のバックグラウンドや経験などによって、東京・奈良・大阪での伝承活動に差異がみられたことがわかる。

とりわけ大阪宝蔵院流槍術でみられた復元という取り組みについては、現在までの伝承を忠実に守ろうとすることからの逸脱とも受け取られる可能性があり、復元した型の再現性や武術としての伝承面の正当性といった問題も残る。しかし、失伝した型や術技を多く含む流派にとって、伝承活動という実践の中で古伝やかつての姿に迫ろうとする試みには、それらの懸念や問題を上回る効用もあると考えられる。現在伝承されている型や術技とは区別して考えられるべきであろうが、宝蔵院流槍術という流儀の本質や槍術技法の幅の広さを理解することにつながり、それを今後の伝承活動にも活かすことができるといえる。

古武道の伝承・復元についても、すでに民俗学の研究で指摘されるように、伝承活動や復元の担い手となる人々に焦点を合わせた調査・研究が求められると考える。[53] 中心的

な人物を捉えて、バックグラウンドの調査やライフヒストリー分析を行うことによって、例えば、本稿で取り上げた宝蔵院流槍術の東京・奈良・大阪の伝承活動のあり方の違いをより深く考察・理解することにもつながり、今後の古武道の伝承活動のあり方を考える上での有益な知見が得られるように思われる。

注

（1）近代以降の武道については、井上俊『武道の誕生』（吉川弘文館、二〇〇四年）、中嶋哲也『近代日本の武道論〈武道のスポーツ化〉問題の誕生』（国書刊行会、二〇一七年）が詳しい。なお、古武道とは、「概ね明治時代以前に必殺の技として生まれた武技を、それぞれの流儀のもとで独特な形として大切にながく継承して来た古流」（二木謙一・入江康平・加藤寛編『日本史小百科〈武道〉』（東京堂出版、一九九四年）二一六頁）とされる。

（2）小山隆秀「青森県における前近代の武の伝承と変容」（『青森県立郷土館研究紀要』第四一号、二〇一七年三月）八一頁。

（3）例えば、同右小山「青森県における前近代の武の伝承と変容」、田邊元「秋田のシシ踊りに伝承される芸能武術―村落社会における武術伝承への考察―」（『スポーツ人類學研究』第一八号、二〇一六年）、田邊元「つながりの中で生まれる技―神道香取流にみる技の復元―」（『現代民俗学研究』第一一号、二〇一九年三月）などがある。

（4）例えば、民俗芸能では、茂手木潔子「新潟県南区月潟における「角兵衛獅子囃子」復元の経緯と現状」（『藝能』第二四号、二〇一八年三月）、山中玲子「『御世話筋秘曲』の解読と復元の記録」（『能楽研究』第四一号、二〇一七年三月）など、古武道では、石川哲也『寶藏院流中村派の術技　第一巻、第二巻』（私家版、二〇一一年）、吉田鞆男・魚住孝至「「三学」組太刀試論」（『武道・スポーツ科学研究所年報』第一〇号、二〇〇五年）などがある。

（5）同右吉田・魚住「「三学」組太刀試論」三六七～三六八頁、小椋一広「古流剣術における型（形）・組太刀の変遷―新陰流と一刀流の変遷について―」（『スポーツ人類學研究』第一七号、二〇一五年）二頁。

（6）前掲小山「青森県における前近代の武の伝承と変容」八六頁。

（7）沼田鎌次『新版　日本の名槍』（雄山閣出版、一九七四

年）一二八頁、福島酔剣『日本刀大百科事典　第三巻』（雄山閣出版、一九九三年）四五～四六頁などでは、胤栄による十文字槍の発明には懐疑的であり、その他の起源説を示している。

（8）島田貞一「宝蔵院流槍術」（財団法人奈良市武道振興会編『奈良の宝蔵院槍術』財団法人奈良市武道振興会、一九八〇年）八～一一頁。

（9）横瀬知之『日本の古武道』（日本武道館、二〇〇一年）二六一～二六二頁。

（10）渡邉一郎『鎌宝蔵院槍術』（奈良市、一九八一年）七三～九二頁。

（11）前掲島田「宝蔵院流槍術」一八頁。原資料は、清水正熾『藝王姓氏録』（一八六〇年）である。

（12）宝蔵院流槍術についての代表的な研究としては、石川哲也「寶藏院流の創流及び伝系の分類に関する研究」（『武道学研究』第三八巻（Supplement）、二〇〇五年）をはじめとする石川による一連の研究がある。

（13）前掲島田「宝蔵院流槍術」一八頁。ただし、下石派や旅川流では、一丈一尺五寸（約三・五メートル）の独特の長い十文字槍を使用しているといった違いもある。

（14）吉次が小笠原家に仕官するまでの経歴については、文献によって様々であり、胤舜門下の六天狗の一人とするものもある（前掲横瀬『日本の古武道』二五九～二六〇頁）。

（15）同右横瀬『日本の古武道』二六〇～二六一頁、前掲渡邉『鎌宝蔵院槍術』七六～七七頁。

（16）前掲二木・入江・加藤『日本史小百科　（武道）』九六頁。

（17）講談社編『日本の武道一一　極意守成の道』（講談社、一九七五年）一一三頁。銃剣道は、明治初期にフランスから西洋式銃剣術を取り入れたことに始まるが、後に日本独自の槍術として宝蔵院流・佐分利流・疋田流・貫流などの心技に源流を置いて、剣道の理論などを合わせて確立されており、槍術は銃剣道に一部受け継がれた側面もある。

（18）前掲島田「宝蔵院流槍術」一九頁。

（19）石川は、山里が遠藤半三郎良淳に師事していたことを示し、そうであるならば、現在広く採用されている小倉の高田吉通から連なる伝承の系譜に疑義を呈する。石川によれば、図2に示されるように、高田吉次の高弟であった森平政綱から竹内六郎左衛門勝重―竹内六兵衛勝辰―吉田太左衛門豊近―吉田弥五

右衛門豊貞―吉田弥五右衛門豊膳―宅間善右衛門憲孝―杉浦藤右衛門勝興―遠藤半三郎良淳を経て山里に至るとする（石川哲也「現伝承の宝蔵院流高田派の術技と伝書に記された術技の差異についての研究」（『関西武道学研究』第二三巻第一号、二〇一四年三月）一一～一五頁）。現在伝わっている宝蔵院流高田派は、島田貞一・今村嘉雄・齋藤聰編『日本武道大系　第七巻』（同朋舎出版、一九八二年）二一〇頁などで江戸に伝わっていたものであることが示唆されていたが、この石川の研究は、それを伝書類の調査・考察から資料面で裏づけた貴重な成果である。

(20) 穴山徳夫「槍一筋宝蔵院流高田派絵目録」（石田和外追想集刊行会編『石田和外追想集』石田和外追想集刊行会、一九八一年）二三六頁。

(21) 山崎卓「有志の槍術　百年の由来」（『文武館』第一六号、二〇〇一年）四頁。

(22) 同右山崎「有志の槍術」二～四頁、前掲穴山「槍一筋宝蔵院流高田派絵目録」二三六頁。矢野は、撃剣部OBが朝稽古をしてから出勤できるようにと考えて、一九四〇年に東京日比谷の第一生命保険社屋の地下に道場を開設しており、GHQによる社屋の接収と武道禁止令の空白期間を経て、一九五二年から稽古を再開していた。

(23) 石田和外「剣術修業のあれこれ」（石田恭子編『子々孫々』私家版、一九八一年）六四頁。

(24) 前掲穴山「槍一筋宝蔵院流高田派絵目録」二三六～二三七頁。

(25) 前掲横瀬『日本の古武道』二六三頁。

(26) 山崎卓『宝蔵院流高田派槍術槍合せの型指南心得帳』（私家版、二〇一二年）三〇～三二頁、忠徳会ホームページ（https://tyuutokukai.wixsite.com/home）二〇二〇年一一月一〇日閲覧。

(27) 前掲穴山「槍一筋宝蔵院流高田派絵目録」二三八頁。

(28) 鍵田忠三郎「お蔭で、宝蔵院流鎌槍奈良に甦る」（前掲石田和外追想集刊行会『石田和外追想集』）二二七～二二九頁。

(29) 前掲山崎『宝蔵院流高田派槍術槍合せの型指南心得帳』三一頁。

(30) 西川源内「宝蔵院槍術の顕彰」（前掲奈良市武道振興会『奈良の宝蔵院槍術』）一～三頁。

(31) 前掲山崎「有志の槍術」五頁。

(32) 宝蔵院流槍術ホームページ（https://hozoin.jp/）二〇二〇年一一月一〇日閲覧。

(33) 前掲横瀬『日本の古武道』二六二頁。

(34) 宝蔵院流槍術ホームページ（https://hozoin.jp/）二〇二〇年一一月一〇日閲覧。

(35) 資料の翻刻としては、西川源内『宝蔵院流十文字鎌槍傳　鎌槍兵法百歌首』（財団法人奈良市武道振興会、一九七七年）、西川源内『高田又兵衛伝　宝蔵院流十文字口伝書　久世大和守廣之著述』（財団法人奈良市武道振興会、一九七九年）、西川源内『宝蔵院流十文字鎌目録之事　武道極意』（財団法人奈良市武道振興会、一九八〇年）がある。これらの成果は、後に財団法人奈良市武道振興会編『奈良の宝蔵院槍術』（財団法人奈良市武道振興会、一九八九年）に再録されている。また、宝蔵院流槍術の歴史をまとめたものとしては、前掲奈良市武道振興会『奈良の宝蔵院槍術』、前掲渡邉『鎌宝蔵院槍術』がある。

(36) 奈良での伝承活動でも、教本として、奈良宝蔵院流槍術保存会編『宝蔵院流十文字鎌槍教本』（奈良宝蔵院流槍術保存会、一九九七年）が発行されているが、東京でみられたような強い規範意識の現れというものではないと思われる。

(37) 奈良宝蔵院流槍術保存会『宝蔵院槍術』（奈良宝蔵院流槍術保存会、二〇一三年八月）、宝蔵院流槍術ホームページ（https://hozoin.jp/）二〇二〇年一一月一〇日閲覧。

(38) 前掲石川「現伝承の宝蔵院流高田派の術技と伝書に記された術技の差異についての研究」二五頁。

(39) 久世広之『印可目録覚書』（一六七七年、前掲島田・今村・齋藤『日本武道大系　第七巻』二三六～二三九頁載録）。

(40) 前掲講談社『日本の武道一一』一一三頁。

(41) 前掲石田「剣術修業のあれこれ」六四頁。

(42) 例えば、前掲石川『寶藏院流中村派の術技』、鈴木太郎「宝蔵院流の基礎的研究―『十文字鎌兵法家元諸伝秘録全』を中心として―」（花園大学文学部国際禅学科卒業論文、二〇一三年）など、優れた研究成果がある。後者は、卒業論文であるために公刊されていないが、詳細な考察の下に復元が試みられた貴重な成果であり、大阪宝蔵院流槍術の復元にも活かされている。

(43) 横道萬里雄「「三山」の復活上演」（『観世』第五三巻第四号、一九八六年四月）三三～三五頁。

(44) 前掲山中「『御世話筋秘曲』の解読と復元の記録」九五～九六頁。

(45) 久世広之『鑓秘書』（一六三六年、東京国立博物館所蔵、請求記号QB―七一八四）。

（46）宝蔵院流高田派の伝書類としては、高田又兵衛吉通の系統による『十文字目録』（一八三〇年、筆者所蔵）、高田新左衛門吉和『十文字鎌目録之事』（一六七二年、筆者所蔵）、高田弥五兵衛吉任の系統で編まれた『寶蔵院鎗術口傳書』（一六七四年、筆者所蔵）、前掲西川『宝蔵院流十文字鎌目録之事』など、鎌宝蔵院の伝書類としては、『十文字鎌兵法　家元諸傳秘録　全』（一八五九年、奈良県立図書情報館所蔵、請求記号五七―一―二六）、中原行光『寶蔵院本来之書』（作成年不明、筆者所蔵）などを用いた。

（47）前掲久世『鑓秘書』。

（48）前掲『寶蔵院鎗術口傳書』。

（49）前掲『家元諸傳秘録』。

（50）前掲西川『宝蔵院流十文字鎌目録之事』四頁。

（51）前掲田邊「つながりの中で生まれる技」四七～四八頁。

（52）俵木悟「民俗芸能の変化についての一考察」（独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所芸能部編『民俗芸能の上演目的や上演場所に関する調査報告』独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所芸能部、二〇〇六年）一六頁。

（53）前掲田邊「つながりの中で生まれる技」四九頁、高久舞『芸能伝承論　伝統芸能・民俗芸能における演者と系譜』（岩田書院、二〇一七年）三九〇～三九一頁。高久は、芸能を伝承する上で芸能の普及、芸能維持の保証、芸能伝承組織の結束力を作り上げる「個」の存在に注目している。